

2008 年 ICU 夏期日本語教育 教務報告

教務主任
鈴木 庸子

1. 日程

a. 夏期日本語教育開始までのスケジュール

2007 年	10 月	受講生募集開始
	11 月	夏期日本語教育講師募集開始
2008 年	2 月	講師依頼開始
	3 月	受講生願書締切 選考開始
	4 月	ラボ助手、教務助手、文化プログラム助手の募集 受講生への合格通知の発送 セクション数、講師のコース担当（仮）を決定 会話ボランティア募集開始
	5 月	講師に担当コースを連絡、使用教科書の送付 会話ボランティア説明会 学生サービスグループと打ち合わせ 総合学習センターと打ち合わせ 図書館と打ち合わせ
	6 月	ホストファミリー説明会（アラムナイハウスにて） ラボ助手オリエンテーション（図書館） プレースメントテスト準備（JLP とともに）
	7 月	講師室・教材作成室設営（ラボ助手、教務助手、ILC） PT 受験室設営

b. 夏期日本語教育期間中のスケジュール

2007 年	7 月 3 日（木）	ヘッド会議 全体講師会
	5 日（土）	PT 実施 歓迎会（大学食堂にて） レベル判定会議
	7 日（月）	PT 結果発表 授業開始 凡人社テキスト販売（本館 2 階中央ラウンジにて）
	9 日（水）	全体講師会（以後、毎週水曜日に行った。）

- 10 日 (木) コース変更最終日
 講師懇親会 (アラムナイハウスにて)
- 8 月 1 日 (金) 講師懇親会 (吉祥寺にて)
- 15 日 (金) コース最終日、歓送会 (高校食堂において)

c. 夏期日本語教育後のスケジュール

- 2008 年 8 月 31 日 コース報告書提出締切
- 8 月 26 日 受講生に修了証の発送
- 10 月 3 日 2008 年度夏期日本語教育報告会・反省会
- 11 月 30 日 『ICU 日本語教育研究 5』研究論文投稿締切

2. コースについて

a. 授業時間とスケジュール

授業時間は以下のとおりである。大学正規コース同様 1 コマを 70 分とし週 5 日 1 日 3 コマ、合計で 6 週間 90 コマ (105 時間) の授業を行った。

1 限	8:40-9:50
2 限	10:10-11:20
3 限	11:30-12:40
昼休み	60 分
個別指導 (水曜を除く)	13:40-14:50

レッスンテストなどは金曜日に行うこととし、木曜日はその準備ができるように文化プログラムを休みにした。

b. コース担当講師 (敬称略) と学生数

レベル	セクション	責任講師	講師	学生数
C1 (初級 1)	A	永富あゆみ	室井章子	8
	B	貴志佳子	田中望美	8
C2 (初級 2)	A	河原由祐子	村上央己	12
	B	増田恭子	津田麻美	11
C3 (初級 3)	A	西脇英美	保坂明香	14
	B	小松満帆	助川愛	14
C4 (中級 1)	A	萩原章子	松本明子	12
	B	目黒秋子	藤原ゆかり	13
C5 (中級 2)		横田淑子	新井優子	14

C6（中級 3）		黒川直子	荒木田京美	8
C7（上級）		数野恵理	高田裕子	4
C8（漢字特別コース）		豊田悦子	江原有輝子	8
8 コース		24 名		126 名

c. 使用教材

主教材として、初級（C1-C3）は『ICU の日本語』、C4 は『日本語中級 J301』、C5 と C6 では『日本語中級 C501』、C7 ではコピー教材と『どんな時にどう使う日本語表現文法 500』、C8 ではコピー教材を使用した。また、C4-C6 では、J301 と J501 をもとに ICU が作成した漢字教材を使用した。

d. 個別指導

午後は個別指導の時間を設けて、クラスの復習、テストのフィードバック、作文の添削、発話指導、参加した文化プログラムの報告、個々の学生の弱点の補強などに当てられた。各学生に対応した細やかな指導を行うことができたが、人数の多いコース、指導に時間がかかる場合などに、1 コマの指導時間を超過することも多かった。

3. 受講生

2008 年度の応募者数は一般応募 185 名、プログラム学生 51 名合計 236 名、年齢層は 18 歳から 50 歳の幅があったが中心は大学生である。プログラム学生はカリフォルニア大学 38 名、ペンシルベニア大学 2 名、ボモナ大学 4 名の交換留学生とロータリー財団の平和研究奨学生（大学院修士課程）7 名の 51 名で、この学生を含む 146 名を合格とした。一般応募学生のうち 22 名はトロント大学からの特別枠の学生で、そのうちの 10 名が合格となった（最終的に 1 名キャンセルとなった）。ICU の春学期から継続して夏期日本語教育を履修した学生は 1 年本科生 3 名、4 年本科生 2 名、夏期日本語教育受講後に ICU の 4 年本科生として 9 月入学した学生は 1 名である。146 名の合格者のうち、21 名が辞退した。他に ICU の教員 1 名が履修したので、最終的な受講生数は 126 名となった。このうち 5 名がコース半ばで中途辞退した。

4. 助手

助手は学生アルバイトの教務助手 2 名、ラボ助手 4 名を配置した。教務助手は、講師室に詰めて茶菓の世話、教務のサポートと会話ボランティアの手配を行った。ラボ助手は、教材作成室のコンピュータ管理、視聴覚機材等の貸し出しとサポート、図書館のヘルプデスクを担当した。今年度の特色として、総合学習センターのラボ教室を利用しなかったため、語学ラボでのサポートはなかった。教務、ラボ助手とも講師室・教材作成室設営と撤収およびブレースメントテストの補助を行った。学内サイトで公募し、日本語教授法修了者を含む 20 名ほどの応募者をディレクターと教務主任が面接し、採用した。

5. プレースメントテスト (PT)

PT は2種類のテスト（漢字テスト、総合テスト）を行うと同時に判定の参考として作文を書かせた。飛行機の到着の関係などで遅延し、別途 PT を受けたものは2名である。実質的な授業時間を減らさないため、前年度のような授業開始日の作文テストとインタビューテストは、実施しなかった。

6. 教務及び学習環境

a. 講師室

例年通り大学本館 202 号室を使用した。レベル及びセクション別に長机 2 台を 1 セットとし、12 の「島」を作った。ほかの設備は例年同様、以下のものが 1 台ずつである。

- ・ 教務主任用机、教務助手用机、教務助手用コンピュータ (PC)、プリンター（教務助手用机とは別の位置に）、コピー機、書架、絵カード教材用机

これ以外に、絵カードなどの収納用キャビネット 2 台を JLP から借り出したが、あまり有用ではなかった。休憩のための設備としては応接セット、冷蔵庫、食器棚、衝立を用意した。12 の「島」が並ぶ状況は、講師室の環境としては少し狭く、机の配置、休憩のための設備のスペースなどに工夫が必要だと思われる。

b. 教材作成室

教材作成室に準備した機材などは表のとおりである。

機材	設置者など
講師用コンピュータ 10 台 (PC8 台、マック 5 台)	総合学習センター
個人コンピュータ用 LAN ポート 7 口	総合学習センター
教室使用用ラップトップ 5 台 及び保管用キャビネット	総合学習センター (本館 212)
8 ミリビデオカメラ	総合学習センターからラボ助手 が移動
プリンター1 台	総合学習センター
コピー機 1 台	リース
ビデオデッキとモニター2 セット	総合学習センター
CD ラジカセ 5 台	JLP からラボ助手が移動
MD6 台	JLP から教務主任が移動
IC レコーダー2 台	JLP から教務主任が移動
小型マイク 4 個	JLP から教務主任が移動

ヘッドセット 2 個	JLP から教務主任が移動
ビデオ教材キャビネット	JLP から移動
オーディオ教材キャビネット	JLP から移動
作業用机（長机 3 台）	他教室より管財グループが移動
ラボ助手用机（長机 1 台）	他教室より管財グループが移動

前年度に懸案事項であった、LAN を講師室にも直接引く可能性については、実施が困難で今回も見送られた。コース最後のアンケートで講師の先生から教材作成室と講師室を 1 部屋にまとめる提案もあったが、メリットとデメリットがあると思われる。

講師が教材作成などを行うためのパソコンの台数は、毎年増やしてはいるものの、講師からは「混んでいて使えないときがある」との意見が寄せられている。講師数 24 名という体制であれば、総合学習センターのコンピュータ室や JLP の非常勤講師用パソコンの利用も併用できると、より良いのではないだろうか。

Macintosh と Windows の台数は、講師の利用機種に合わせて配置するのが望ましい。

c. 教室

本館東ウイングの 1 階から 3 階まで 12 室を使用し、試験、口頭発表、インタビューの控え室などの目的で予備の教室を 2 部屋常時予約した。会話ボランティアの控え室として本館 2 階のラウンジも使用したがクーラーがなく、良い環境とは言えなかった。コンピュータールーム兼ラボの教室として図書館マルチメディアルームを使用した。

d. 自習および IT 環境

今年度は総合学習センターの工事のため受講生によるコンピュータの利用はオスマー図書館の 2 階スタディーエリアに限られた。プリンターは同エリアにサマーコース受講生専用の 1 台を確保し、ラボ助手が 12 時 40 分から 4 時まで管理した。ワープロによるレポートなどの宿題の提出はこの時間に合わせて締切を午後 4 時とした。図書館の利用時間は午前 9 時から午後 7 時のため、授業前の時間に文化プログラムラウンジの助手用のコンピュータを利用する受講生が見られた。

e. 視聴覚教材・機材など

教材作成室の機材については、教室使用のラップトップと 8 ミリビデオカメラはラボ助手が管理し、そのほかの機材および教材は講師が各自で借り出した。

OHP および OHC は ILC の担当スタッフ小島氏（H-169）に依頼した。

7. 会話ボランティア

各コースで基本的に 2 回を目処にビジターセッションを行った。ビジターセッションには

ICU の 4 年本科生と一般社会人に会話ボランティアを募り、協力してもらった。一般社会人による会話ボランティアは MISHOP（財団法人三鷹国際交流協会）の日本語教授法講座の受講者のほか、今年度からホストファミリーにも依頼した。ICU の学生 80 数名、一般社会人 10 数名の参加があった。

ビジターセッションは、コースを通して毎週木曜日と金曜日に限り、そのかわり時間は 1 限から 3 限までをあてた。ICU4 年本科生に対しての会話ボランティアの募集は大学ウェブサイトを通して行われ、200 名の参加申し込みがあった。しかしコースが始まってみると実際に参加してもらえる学生は半数弱となり、どちらかと言えばボランティアが足りない状況になった。

会話ボランティアのほかに、今年度から「会話パートナー」の制度を設け、希望する留学生と 4 月生の斡旋を行った。この制度はコース開始後に留学生からの要請を受けて始めたため、実際に動き始めるまで時間がかかったが、文化ボランティア、会話ボランティアの募集時点でこの制度も紹介し、斡旋の方法を検討したうえで有効に活用されるとよいと思う。

8. 健康管理

昨年度に引き続き、サマーコース担当の看護師を依頼することができた。6 週間という短い期間ではあっても、暑い時期に環境の異なるところでストレスの高い集中コースに参加していることなどから、健康面で実に様々な問題がおこった。学生の心身の健康管理にとって、看護師の制度は非常に重要であり、できれば今年度のような 5 週間の契約ではなく全期間通して常駐できればよいと思う。

9. 今後への課題等

- ① 昨年度の課題に挙げられていたが、地震、大雨・洪水などの災害に対して、今年も適切な対策をとることができなかった。授業中の地震、それ以外の時間帯に発生した災害にあたって、指針が必要である。受講生のみでなく、講師も三鷹地域に不慣れな場合があり、専門家のアドバイスなども受けて検討すべきだと思われる。
- ② 前年度に C8 が開講できなかった事例に鑑み、今年度は学生の選考の段階から C8 と思われる応募者に配慮をした。今年度の応募者は、正規コースの日本語特別教育と対照すると、日本語特別教育プログラム A と外国語としての日本語のコースの中間的な段階にある応募者が多いと思われた。漢字力が中級にとどかず、場合によっては初級に配属される可能性のある応募者には、直接連絡をとってその懸念を伝えた。結果として、日本語を母語とする応募者のうち、4 名が中級に、7 名が C8 のコースに配属された。これらの受講生にコース開始後インタビューを行い、応募動機や配属されたコースでの学習について尋ねたところ、中級に配属された学習者からは大きな問題は指摘されず、C8 の学習者からは、C8 の中でのレベルの違いが大きいことが問題であることが指摘された。C8 はコース開始まで学習者のレベルが特定できず教材が決められない、レベルの違いが大きいなどの事情があり、担当者の負担がことのほか大きくなる。

- ③ 言語プログラムと文化プログラムの連携のために、文化プログラムでの体験をスピーチにする、個別学習の時間に体験を話させる、文化プログラムの講演の内容をプロジェクトに入れるなど、言語プログラムからの積極的な協力があり教育的に有効だったと思う。
- ④ 本館の教室でインターネットに接続するためには **Wireless Internet** を使用するが、電波の弱い教室ではインターネットに接続できない。電波の状況を事前に把握し、その情報を講師に伝えておく必要がある。